

便潜血反応陽性により発見された大腸癌の臨床病理学的検討

高山 成吉¹⁾²⁾ 立石 訓己¹⁾ 二見喜太郎¹⁾
河原 一雅¹⁾ 成富 一哉¹⁾²⁾ 永川 祐二¹⁾
有馬 純孝¹⁾ 岩下 明德²⁾

¹⁾福岡大学筑紫病院外科, ²⁾同 病理

要旨：便潜血反応による大腸癌検診の意義を検証することを目的とし、1985年7月から1997年12月までに経験した大腸癌を、便潜血反応陽性により発見された100例と有症状により発見された665例に分け臨床病理学的に比較検討した。便潜血群は経時的に増加しており、近年は全症例の約20%であった。癌占拠部位別（右側結腸、左側結腸、直腸）に比較すると、便潜血群は右側結腸で有意に多かった ($p < 0.01$)。また、進行度別にみると各部位ともに便潜血群で早期癌が有意に多くみられ ($p < 0.01$)、とくに右側結腸、直腸に顕著であった。外科治療としては切除率、治癒切除率ともに便潜血群で有意に高く、5生率の比較でも便潜血群は有症状群に比し有意に予後良好であった (94.5% vs 66.9%, $p < 0.01$)。便潜血反応による検診はより近位に位置する大腸癌および早期癌の発見に有用であり、大腸癌の予後向上に寄与するものと考えられる。

索引用語：便潜血反応, 大腸癌, 予後